

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12046

研究課題名(和文) 神経難病患者の痛みの看護を推進するための神経内科看護師への支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a support program for neuromedical nurses to promote pain nursing for patients with intractable neurological diseases

研究代表者

森谷 利香 (Moriya, Rika)

摂南大学・看護学部・教授

研究者番号：20549381

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として、第1段階で神経難病患者の知覚異常(痛み、痺れなど)に関する経験を明らかにした。患者が様々な知覚異常を経験しながらも独自対処していることが明らかとなった。つまり看護援助の積極化が必要な状況であった。第2段階では、神経内科病棟に勤務する看護師243名を対象に、知覚異常を含む8の症状緩和に関する看護実践の現状と困難について調査した。結果、症状発症の機序や患者の理解、そして心理的な援助への教育ニーズを明らかにできた。第3段階では、過去の取り組みから「リフレクション」を主として「神経難病患者の痛みの看護に関する神経内科病棟看護師を対象とした支援プログラム作成」の骨子を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、神経難病患者の知覚異常に焦点を当て、まずその経験を明らかにした。過去に知覚異常を持つ神経難病患者の事例研究は散見されるが、患者の経験そのものを明らかにしたのは本研究が初めてであり、患者が症状の体験と対処を繰り返しながら病と共にある様相は、神経難病看護において重要な視点となる。加えて、神経難病看護師の看護実践の現状と困難についても我々は取り組み、神経難病特有の看護の困難を導き出した。当初の想定と異なり、知覚異常以外の症状に対しても看護師の実践と困難に課題があり、神経難病患者の症状緩和全般に対する教育プログラムの創設が必要と結論付けるとともに、今後の研究の方向性が明確となった。

研究成果の概要(英文)：As the result of our research, we clarified the experience of paresthesia (pain, numbness, etc.) in patients with intractable neurological diseases in the first stage. It was clarified that the patient was undergoing various paresthesias and was coping with it independently. In other words, it was a situation where active nursing support was necessary. In the second stage, we investigated the current state and difficulties of nursing practice regarding symptomatic relief of 8 symptoms including paresthesia for 243 nurses working in a neurology ward. As a result, we were able to clarify the mechanism of symptom onset, understanding of patients, and educational needs for psychological assistance. In the 3rd stage, the outline of "Reflection" and "Support program creation for neurological ward nurses regarding pain care for patients with intractable neurological diseases" was constructed from the efforts so far.

研究分野：臨床看護学

キーワード：神経難病 看護 症状

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

神経難病の痛みの原因としては、神経の損傷や感覚受容器の問題などが明らかにされており、心理社会的要因の関与も報告されている。また神経難病患者の場合、疼痛コントロールが困難で患者の苦痛が非常に大きいという事例研究が複数あり、内外を通じて痛みが神経難病患者の QOL に影響することが明らかにされている(Clemenz,2014)。神経難病患者の痛みに対する治療に関する論文では、麻薬の使用や、リハビリテーションについての事例研究が幾つかある。日本神経学会は神経難病の痛みに対するオピオイドの使用を推奨しているものの、実態の報告は十分ではなく効果や副作用について検討段階にある。

神経難病患者は日常生活が著しく制限されることが多く、長期の療養を余儀なくされるが、さらに痛みによって患者が長期臥床状態となり、その状態が痛みの原因となるといった悪循環も指摘されている。よって痛みのケアが患者の QOL に与える影響は大きく、神経難病患者に対する看護において、痛みのケアの重要性も高いと考える。神経難病によって痛みがある患者への看護については、多発性硬化症や大脳基底核変性症に対してリラクゼーション、あるいは内服や保清のタイミングの調整などを試みた事例報告がある(中庭, 2010; 森, 2008)。しかし、神経難病による痛みに対する治療と同様に、有効な看護に関する報告は少ない。

また痛みは主観的な感覚であるのに、評価のために客観的な指標を看護師が求めるという矛盾は、これまでも指摘されている。神経難病患者の主観的な感覚である痛みをより理解するためには、その体験を明らかにする必要があるが、未だ十分な報告はない。そこで、本研究に取り組むにあたっては、神経難病患者の痛みをどのように評価するかが一つの焦点となり、そのためにはまず難病患者の痛みの経験を、患者の主観という視点で理解することが重要な課題となる。

一方、申請者らによる先行研究では、神経難病患者に対して十分なケアが行えていないことが看護師から語られた。これに付随して、看護師は自らのケアに満足感や達成感がなく、また医師主導の症状コントロールと、痛みを訴える患者との間で葛藤し不全感を抱いていた。先行研究では、神経難病患者の看護については専門性が高くケアが困難であることや他の診療科の看護師に比べてバーンアウトしやすいことなどが報告され、その看護の難しさおよび精神的負担が指摘されてきた(安東ら, 2009)。さらに、看護師が神経難病患者の痛みに対して何を知りたいと考えているのかという教育へのニーズも報告がない。このような中、看護師が神経難病患者への看護において過去に成果のあった実践を別の患者にも適応する、あるいは患者とのかかわりの中での気付きを活かすといった「経験」を活用する様子を私たちはインタビューを通して見出してきた。我々は、この看護師の「経験」に着目することで、看護師が難病患者の痛みのケアの質を向上できることに寄与し、そして自らのケアに対して達成感が得られるような支援プログラムを作成できると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、神経難病患者の痛みの経験と実態を明らかにする、神経内科病棟看護師の神経難病患者の痛みの看護に関する教育ニーズを明らかにする、神経内科病棟看護師への痛みの看護を促進する支援プログラムを考案し評価する。

### 3. 研究の方法

#### **第1段階：神経難病患者の痛みに関する経験や実態を明らかにする。(2016～2017年)**

この段階の目的は、神経難病患者の痛みに関する経験を明らかにすることである。研究方法は痛みのある神経難病患者のうち、痛みに関する報告の多い多発性硬化症、視神経脊髄炎患者 11 名に対するインタビューを行い、痛みの認知、痛みによる生活への影響や対処などを含む経験やニーズを質的に記述した。参加者は、当事者団体より痛みを有する神経難病患者を数名紹介いただき、ネットワーク標本抽出法によってデータが飽和化するまで参加者を選択する。

#### **第2段階：神経内科病棟看護師の神経難病患者の痛みへの看護に対する教育ニーズを明らかにする。(2017年～2019年)**

この段階の目的は、神経内科病棟看護師の神経難病患者の痛みへの看護に対する実態と課題を量的に調査し、そこから教育ニーズを明らかにすることである。まず教育ニーズの捉え方を検討した。教育ニーズについて三浦ら（2005）は、「看護専門職としての望ましい状態に近づくための教育の必要性」と定義している。また、本田（2000）は教育ニーズについて、当事者の抱える困難や希望する研修としてニーズを捉えた場合、当事者の捉える問題や困難以外の新しい学習機会を明らかにできないことや系統的な学習を導くことが困難であると述べ、院内教育における教育ニーズを「看護の専門能力」から把握していた。そこで本研究では、神経難病患者の症状に対する看護において必要である看護実践の現状と困難からの差異という視点から、教育ニーズを捉えて分析することとした。

上記を踏まえて研究方法は、まず神経難病患者の看護実践の現状を把握するため、それらの具体的項目による質問紙を作成した。それを用い、全国の神経内科病棟を有する病院に所属する神経内科病棟看護師を対象に、看護実践の状況と困難について調査した。調査項目は、対象者の属性、看護実践、困難、自己啓発やストレスマネジメントの状況とした。分析は、主に教育ニーズに関する記述統計とともに、経験年数別、所属機関別に教育ニーズの特徴や、自己啓発、ストレスマネジメントについても属性による差異を検討した。

### **第3段階：神経内科病棟看護師への支援プログラムの考案（2018年進行中）**

この段階の目的は、神経内科病棟看護師による神経難病患者の痛みの看護の質の向上、これらの看護に伴う困難を軽減するための支援プログラムを作成することである。本研究では、看護師の経験を振り返る、つまりリフレクションの技法に基づくプログラムを作成することを検討している。Gibbsのリフレクションサイクルでは、自分の実践の良否とその理由を詳細な状況と共に表現し「推論」するステップ、次に自分の感情や思いと実践への影響を批判的に検討する「分析」のステップ、および同じような状況を想定して次の実践を考える「評価」のステップ、最後に自らの課題と解決に向けた具体的な取り組み方法を明確にする「アクションプラン」で構成される。これらの各ステップに、本研究の第1段階ならびに第2段階の結果、そして専門家からのアドバイスと文献レビューを踏まえたプログラムを作成する。

## **4. 研究成果**

### **第1段階：神経難病患者の痛みに関する経験や実態を明らかにする。（2016～2017年）**

知覚障害の実際には、患者が経験している知覚障害 日常生活に影響を与える知覚障害 知覚障害の変動 という3テーマが帰納的に導かれた。具体的には【しびれは慣れるが、痛みは耐え難い】【多彩なしびれの感じ方】【痛み・しびれとは異なる知覚障害】【特定の部位に限局した知覚障害】といったカテゴリーが生成され、しびれはあっても日常生活を送る上で慣れが生じていた。【痛み・しびれによる日常生活への影響】では、手・手先のしびれや感覚鈍麻に伴う把持力の低下などがみられた。【症状の発現のタイミングは様々】【症状を悪化させる要因は様々】については患者によって様々な症状悪化要因があった。

知覚障害の対処では、《知覚障害の緩和・悪化の予防》《知覚障害に伴う日常生活や役割への影響の補完》《知覚障害に対する精神的支え・認識的コントロール》《知覚障害の対処への認知》という4テーマが導かれた。【知覚障害を緩和する】【活動と休息を工夫する】【予測して判断する】では薬物療法やストレッチなどの緩和方法や、活動と休息のバランスを図ることで悪化を防ぎ、症状への対処の判断などについて語られた。また【関係性を維持しながらサポートを受ける】【知覚障害による二次的影響を抑制する】【対処による弊害を抑える】【知覚障害と役割のバランスをとる】では対象は相手との関係性を見極めながら理解を求めたり家事を依頼していた。【傾聴・共感で安心を得る】【気持ちをコントロールする】【知覚障害と一体になる】【比較して現状を良いものと捉える】では知覚障害について考えすぎずに前向きになるなど意図的に解釈していた。【対処は自分でする】【対処できない】では、対処は自分で情報を得て編み出していることなどが語られていた。

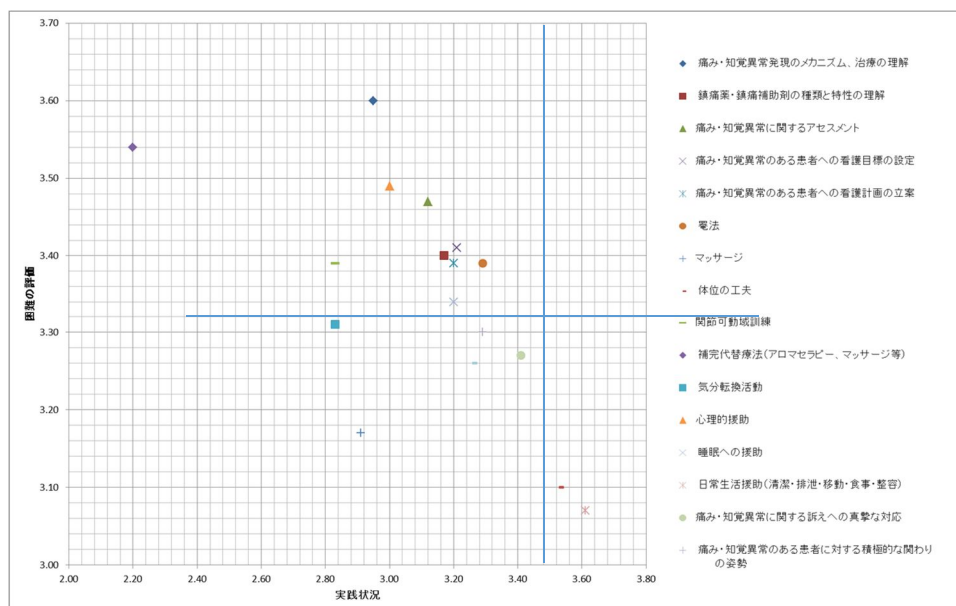
### **第2段階：神経内科病棟看護師の神経難病患者の痛みへの看護に対する教育ニーズを明らかにする。（2017～2019年）**

神経難病患者の症状に対する看護実践について、呼吸障害、嚥下障害などそれぞれの症状に対する事例研究が散見されたが、神経難病患者の多様な症状を総括した研究報告はなかった。そこで、国内外の文献や書籍について検討し、神経難病患者に多く見られる症状として「意識障害」「呼吸障害」「運動障害」「知覚障害」「言語障害」「嚥下障害」を抽出した。そして、各症状に必要な看護援助として、症状緩和や補完のための看護技術の他、アセスメントや日常生活援助、対応、心理面への援助、家族看護、多職種連携などを問う項目を作成した。これらに対して、実践状況、および実践上の困難について5段階のリッカート尺度で評価を求める調査票を作成した。調査票のプレテストとして、2016年度に訪問した神経内科病棟を有する2施設の看護師を対象に調査を行い、調査票への回答を求めるとともに、各項目へのコメントを記載してもらった。52名からの回答を得て、分析し、内容妥当性を検討するとともに、質問項目の精選を行った。

以上の過程を経て、7症状94項目の実践状況、および実践上の困難に関する質問項目を完成させた。加えて、回答者の基本属性、自己研鑽やストレスマネジメントの状況、知覚障害の看護についての自由記載についても含めた。現在24施設の神経難病看護に携わる看護師への調査が終了し、243人（回収率35.9%）より回答を得た。

分析の結果、運動機能障害、呼吸機能障害、嚥下障害、意識障害、感覚障害、言語障害という

いずれの症状においても症状発症の機序の理解や心理的な援助に対して、困難と実践の程度の乖離、つまり教育ニーズがあることがわかった（右図は感覚障害）。さらに詳細に分析、検討を行い、経験年数や所属する病院機能によっても教育ニーズや看護師の自己研鑽の状況も異なることなど、その



背景と教育ニーズについて発表してきた。神経難病看護に携わる看護師243名から回答を得ており、このような規模の調査は国内で報告がないため、神経内科看護の現状調査として有意義と考える。

学会発表を経て、他の研究者や臨床看護師とのディスカッションでは、実践の程度についての自己評価は実際のケア提供の程度と異なる可能性があり、神経難病看護師の不全感につながるという示唆を得た。そこで支援プログラムでは、一方的な知識の提供ではなく、看護師の実践の内省を深め、自己の実践を意味づけることに焦点を当て、結果として不全感を和らげるための支援が必要という結論を得た。

### 第3段階：神経内科病棟看護師への支援プログラムの考案（2018年進行中）

第1段階、第2段階、およびこれまでの取り組みの結果から、以下のようなプログラムに再構築することが望ましいと検討してきた。まず、痛みを中心とした知覚障害以外にも対象とする症状を拡大する。これは、第2段階の神経内科病棟看護師の教育ニーズから、知覚障害以外の症状についても同様に看護師は困難を抱えていた。よって、痛み・知覚障害に限局せず、広く神経難病患者の症状を対象としたプログラムの再構築が必要と考えている。次に、神経内科病棟看護師の抱える課題に対する教育支援プログラムとすることである。これらの課題とは、知識基盤が不足していること、負の感情体験、患者理解の困難さである。課題に対して、暗黙知、感

情体験、患者理解をキーワードとして支援プログラムに含める。最後に、より主体的なプログラムに再構築することが重要である。経験を主体的に振り返る能力を涵養することが、看護師個人の能力開発とともに、組織、部署など、共に看護実践を行うチームを導く力となると考えた。

以上の新たな要素を含めつつ、支援プログラムの基盤は「リフレクション」である。看護におけるリフレクションは、自らの実践を振り返ることで複雑な看護実践に対するより深い内省が促進されることや、実践能力の向上に寄与する可能性が報告され、今後我々も取り組みの重要な視点として取り入れたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森谷利香、山本裕子	4. 巻 22
2. 論文標題 知覚異常をもつ神経難病患者への看護の促進に向けた教育プログラムの実践 - 看護経験に着目して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本難病看護学会誌	6. 最初と最後の頁 257-268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本裕子、森谷利香	4. 巻 13(2)
2. 論文標題 看護経験の協調的リフレクションにもとづく神経難病患者の看護を促進する教育プログラムの検討-教育プログラム1か月後の変化-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本慢性看護学会誌	6. 最初と最後の頁 115-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 森谷利香、山本裕子
2. 発表標題 神経難病患者の症状に対する看護実践の現状および困難に関する調査
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本裕子、森谷利香
2. 発表標題 神経難病患者の症状に対する看護実践の現状および困難に関する調査1) 意識障害、呼吸困難、運動障害
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuko Yamamoto, Rika Moriya
2. 発表標題 Investigation on the Present Condition and Difficulties of Nursing Care for Symptomatic Patients with Intractable Neurological Disease
3. 学会等名 The 4th International Conference on Prevention and Management of Chronic Conditions (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森谷利香、山本裕子
2. 発表標題 多発性硬化症患者・視神経脊髄炎患者の知覚異常に伴う経験に関する質的研究 対処の実際
3. 学会等名 第22回日本難病看護学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本裕子、森谷利香
2. 発表標題 多発性硬化症患者・視神経脊髄炎患者の知覚異常に伴う経験に関する質的研究-症状の実際-
3. 学会等名 第22回日本難病看護学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森谷利香、山本裕子
2. 発表標題 多発性硬化症患者・視神経脊髄炎患者の知覚異常に伴う経験に関する質的研究 看護職者へのニーズ
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本裕子、森谷利香
2. 発表標題 視神経脊髄炎患者の経験する痛みの性質
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森谷利香、山本裕子
2. 発表標題 知覚異常のある神経難病患者への看護を促進する教育プログラムの検討(第1報)-グループ討議での語り-
3. 学会等名 第21回日本難病看護学会学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山本裕子、森谷利香
2. 発表標題 知覚異常のある神経難病患者への看護を促進する教育プログラムの検討(第2報) - 教育プログラムの効果 -
3. 学会等名 第21回日本難病看護学会学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 森谷利香、山本裕子
2. 発表標題 看護経験に着目した知覚異常に関する神経内科看護師教育プログラムの実践(第1報) - グループ検討の効果 -
3. 学会等名 第36回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2016年



1. 発表者名 山本裕子、森谷利香
2. 発表標題 「経験」に着目した知覚異常のある神経難病患者の看護を促進する教育プログラム(第2報) - 実施後の変化 -
3. 学会等名 第36回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yuko Yamamoto, Rika Moriya
2. 発表標題 Support required by nurses in neurology wards to help them maintain their morale
3. 学会等名 20th East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 R Moriya, Y Yamamoto
2. 発表標題 A study on the importance of nursing for intractable neurological disease patients with dysesthesia
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Y Yamamoto, R Moriya
2. 発表標題 A Qualitative Study on Nursing Practice for Intractable Neurological Disease Patients with Dysesthesia
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	山本 裕子  (Yamamoto Yuko)  (40263272)	畿央大学・健康科学部・教授    (34605)	